日本の幼年童話29

おばあさんのとっくり

砂田　弘・作
富永秀夫・絵

岩崎書店

日本の幼年童話29
おばあさんのとっくり
砂田　弘・作
岩崎書店　1977
114P　21cm／NDC 913

日本の幼年童話29
おばあさんのとっくり
1977年1月31日　発　　行
1977年6月15日　第3刷発行
著者／砂田　弘
発行者／森山甲雄
発行所／岩崎書店
東京都文京区水道 1-9-2　〒112
電　話　03・812・9131
振替　東京　7-96822
活版印刷／第一印刷株式会社
オフセット印刷／清水印刷紙工株式会社
製本／株式会社　小高製本

© Hirosi Sunada, 1977

(分)8393(製)512977(出)0360

砂田弘 作
富永秀夫 絵

おばあさんのとっくり

日本の幼年童話29
岩崎書店

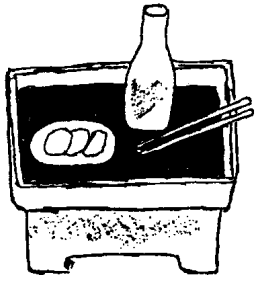
日本の幼年童話　29　おばあさんのとっくり　もくじ

むかしは　みんないちばん……5

ユミのにいさん……21

おばあさんのとっくり……33

中川くんのハンカチ……71

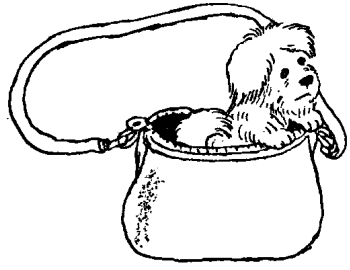


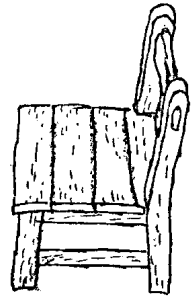
わたしのチャッピイ……83

解説＝作家と作品について……関　英雄

装幀＝宮川源太郎

表紙・口絵・さし絵＝富永秀夫





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

読者のみなさんへ

このシリーズ『日本の幼年童話』は，日本の近代，現代の創作童話のなかから，小学校初級〜中級程度の読者を対象に，現代の子どもの興味をひき，児童文学として朽ちない生命をもつ作品を精選して，おもに作家別に編集したシリーズです。

幼年童話という形式や枠にとらわれず，作品の質を第一に，広い範囲から自由な作品選択をおこなったところに，このシリーズの特色があります。父母・教師のかたたちにも，あわせてご愛読をえられれば幸いです。

編集委員

菅　忠道／関　英雄

作者紹介

砂田　弘（すなだ・ひろし）

1933年，朝鮮に生まれる。早大文学部卒業。おもに少年少女小説を書き，1971年『さらばハイウエイ』で日本児童文学者協会賞をうける。そのほか，『東京のサンタクロース』『道子の朝』『サインのない手紙』『六年生のカレンダー』など多くの作品がある。最近は絵本，幼年童話，ノンフィクション，児童文学評論などの分野でも活躍。
日本児童文学者協会会員。

むかしは　みんないちばん

1

つうしんぼをもらったのは、ちょうど土よう日で、家にはおとうさんがいました。

さいしょに、つうしんぼを見たのは、おかあさんでした。

「おや、おや」

と、あきれたように、おかあさんは、いいました。

おとうさんは、ねころんで、テレビのえいがを見ていましたが、ゆっくり立ちあがり、おかあさんのかたごしに、つうしんぼをのぞきこんで、やはり、

「おや、おや」

と、いいました。

〈人のつうしんぼを見て、「おや、おや」なんて、しつれいだぞ。それとも、親がふたりだから、「おや、おや」なのかな〉

マサルは、そうおもいましたが、だまっていました。せいせきが、あまりよくなかったからです。

「これじゃ、こまるわね」

しばらくして、おかあさんがいいました。

「二年生のときより、さがっているし」

「うん、これじゃ、こまる」

大きくうなずいて、おとうさんは、また、おかあさんとそっくりのことをいいました。

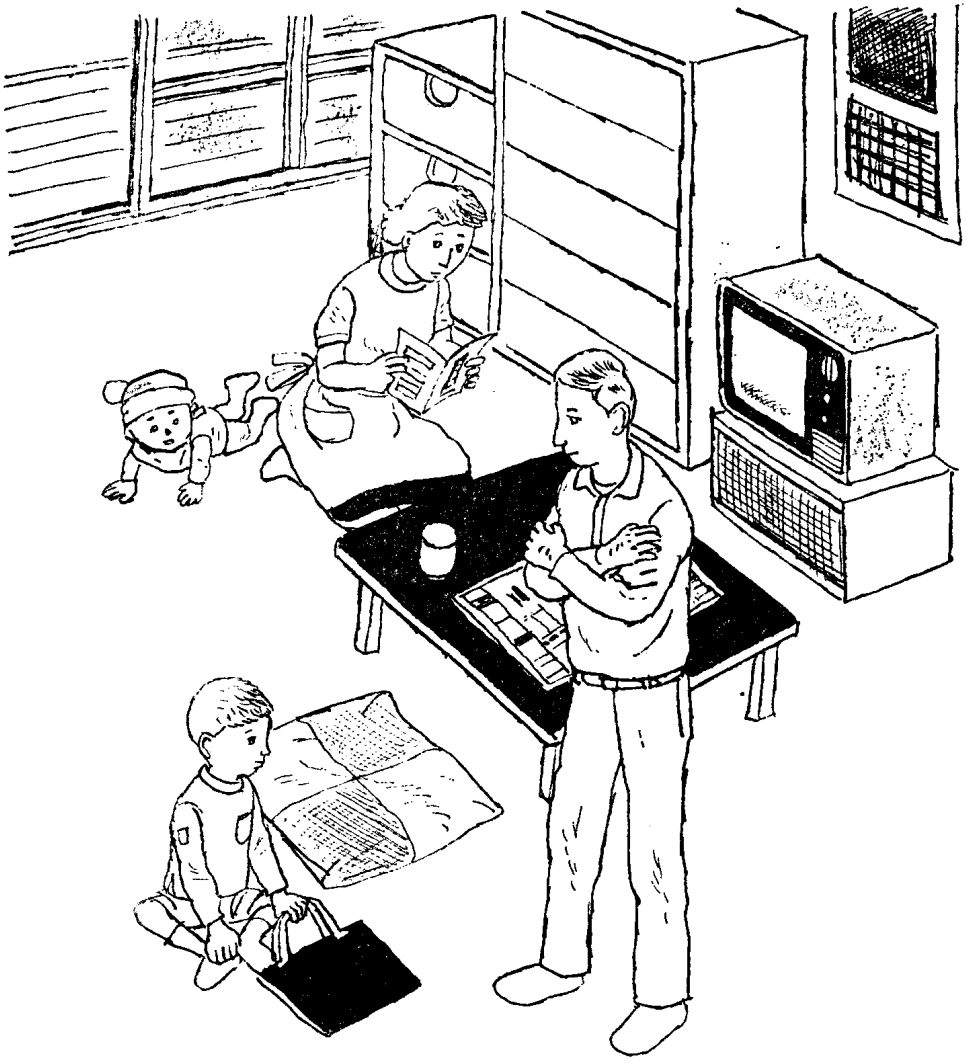
パパーン、キューン！

テレビでは、せんそうのえいがをやっていて、ちょうど、せんしゃとせんしゃが、ぶつかりあおうとしていました。

「かっこいいな！」

と、マサルがいったとき、おかあさんが手をのばし、プツンと、テレビをけしました。

「しっかりしなくちゃ、だめよ」
おかあさんは、マサルをにらみつけました。これまで見たことのない、こわいかおでした。
「おとうさんも、しかってやってくださいよ」
「うん」
おとうさんは、立ったまま、うでぐみをして、マサルのすわっているまえまで、やってきました。
「三年生になったんだから、もうすこし、しっかりべんきょうしなくてはいかん。とうさんなんか、子どものころは、ずっと、いちばんだったぞ」
「そうよ」
よこから、おかあさんも、いいました。
「おとうさんはなにをやっても、いちばんでしたよ」
〈ちょっとおかしいな〉と、マサルはおもいました。



9　むかしは　みんないちばん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おかあさんは、生まれてからずっと東京にすんでいますが、おとうさんは、大学にはいるまでは、ずっと四国のいなかにいたのです。それなのに、どうして、おかあさんが、おとうさんの子どものころのことを、知っているのでしょうか。

でも、マサルは、だまっていました。おかあさんが、さっきよりももっと、こわいかおをしていたからです。

「夏やすみのあいだ、国語とさんすうを、しっかりやるのね。おとうさん、たまには、見てやってくださいよ」

おかあさんが、おとうさんをふりむきました。おとうさんは、これまでいちどだって、マサルのべんきょうを見てくれたことは、なかったのです。

「よし、きた」

おとうさんが、そういうのをきいて、マサルは、

「やれ、やれ」と、おもいました。

2

夏やすみになって三日めに、学校でプールがありました。

じゅんびたいそうをしているとき、となりの小野くんが、

「つうしんぼって、いやだな。ぼく、しかられちゃった」

といって、にやりとしました。

すると、小野くんのとなりにいた根本くんも、

「ぼくもだ」

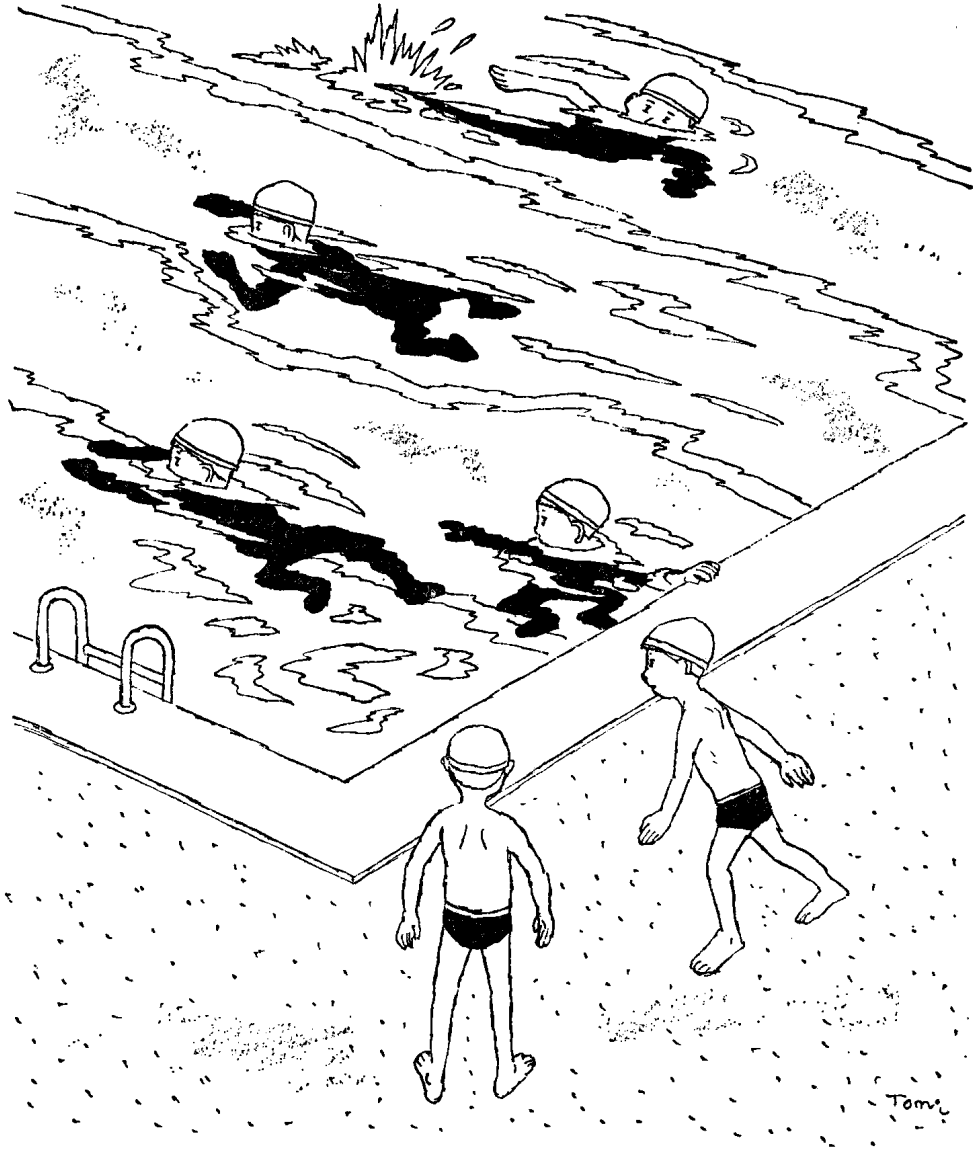
と、ゆびをポキリポキリとならしました。

「ぼくも、とうさんとかあさんに、ぎゅうぎゅう、しぼられちゃった。一時間も、しかられたよ」

小野くんも、根本くんもしかられたときいて、あんしんしたマサルは、すこし大げさにいいました。

「ぼくのおとうさん、すごいよ。子どものころ、いつもいちばんだ

ったんだって」
小野くんがいうと、すかさず、根本くんもいいました。
「うちのとうさんも、中学まで、ずっといちばんだったってさ」
マサルも、まけてはいられません。
「かあさんにきいたんだけど、ぼくのとうさん、大学をでるまで、ずっといちばんだったそうだよ」
おかあさんのいわないことまで、いってしまいました。
「それっ！」
かけごえといっしょに、小野くんは、あたまからプールにとびこみました。小野くんは、クラスでいちばん、水えいがうまいのです。
そこへいくと、根本くんもマサルも、平およぎで、やっと二十メートルくらい、およげるようになったばかりです。
ふたりは、プールの手すりにつかまって、ゆっくり、水の中にはいっていきました。



13 むかしは　みんないちばん

3

秋になりました。

九月さいごの日よう日は、運動会でした。

プログラムがすすみ、校舎の長いかげが、グラウンドにのびたころ、おとうさんたちのボールころがしきょうそうが、はじまりました。

「とうさんだ」

根本くんが、赤いぼうしに手をやって、立ちあがりました。

「どの人？」

マサルも、立ちあがりました。つづいて、小野くんも、立ちあがりました。三人とも、赤組でした。

「ほら、右から三ばんめ」

赤いはちまきをして、こぶしをかためて、走る身がまえをしている、

せのひくい人が、根本くんのおとうさんでした。
ピストルがなり、六人のおとうさんたちは、白い大きなボールをけりながら、いっせいに走りだしました。
「がんばれ、がんばれ！」
根本くんは、むちゅうで、手をふりました。さいしょのカーブまで、根本くんのおとうさんは、トップでした。
「見えないぞ、すわれ！」
うしろで、みんながどなるので、三人は、こしをかがめました。そのあいだに、根本くんのおとうさんは、あとからきた人に、つぎつぎにぬかれて、ゴールにはいったときは、四ばんめでした。
「なあんだ」
ぽつんと、根本くんはいい、口をとがらせました。
「だって、きみは、五等だったじゃないか」
と、小野くんがいいましたが、根本くんは、口をとがらしたままで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com